

平成17年度病害虫発生予察特殊報第1号

平成17年5月19日

埼玉県病害虫防除所

MYSV (*melon yellow spot virus*) によるキュウリ黄化えそ病の発生について

1 発生経過

平成17年4月上旬、県北地域で栽培されている半促成キュウリ（施設）において、ウイルス症状が見られる株が発生した。埼玉県農林総合研究センターでRT-PCR法による検定を行ったところ、5月17日にMYSVが検出され、県内では未確認のキュウリ黄化えそ病と判明した。

ちなみに本病は、キュウリでは平成8年には高知県、平成12年に愛媛県、平成14年に群馬県、平成15年に神奈川県、福岡県、平成16年に三重県、平成17年に佐賀県、熊本県、宮崎県で発生が確認された。

2 病徴及び病原の諸性質

(1) 病徴

キュウリでの病徴は、葉では、はじめ葉脈透化症状が現れ、その後、モザイクを生じたり、退緑あるいは黄化し、えそ斑点を生じたりする。感染株は生育が抑制され減収する。また、症状が激しい場合は枯死することがある。果実ではほとんど症状はみられないが、果実表面にモザイク斑を生じることがある。

(2) 伝染方法

ア 本ウイルスはミナミキイロアザミウマによって媒介されるが、他のアザミウマ類による媒介は不明である。

イ アブラムシ類等その他の虫は媒介しない。

ウ ミナミキイロアザミウマは幼虫時に感染株を吸汁することでウイルスを保毒し、一生ウイルス伝搬能力を持つが、経卵伝染はしない。

エ 汁液伝染力はほとんどしないため、作業管理で伝染する可能性は低い。

オ 種子伝染、土壌伝染はしない。

(3) MYSVの主な宿主範囲

ウリ科：○キュウリ、○メロン、○スイカ、トウガン、ユウガオ、ヘチマ、ニガウリ

ナス科：ペチュニア

ゴマ科：ゴマ

アカザ科：ハウレンソウ

ツルナ科：ツルナ

ゴマノハグサ科：キンギョソウ、トレニア

※ ○印は自然感染が確認されている植物。他は実験的に感染が確認されている植物。

3 防除対策

- (1) 施設栽培では施設開口部に防虫ネットを設置し、アザミウマ類の侵入を防ぐ。
- (2) 青色粘着トラップを施設内に設置し、媒介虫の早期発見に努める。
- (3) アザミウマ類の発生初期から薬剤防除を行い、薬剤抵抗性虫の発現を避けるため、同一系統薬剤の連用を避ける。
- (4) 発病株は伝染源となるため、発生のごく初期に、直ちに抜き取りビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理する。その後ほ場外に持ち出し埋没処理する。
- (5) 施設栽培では、栽培終了時はハウスを密閉処理を行ってから残さを片づけ、アザミウマ類が施設外に飛び出さないようにする。
- (6) ほ場周辺及び内部の雑草は、媒介虫の生息・増殖場所となるので除草する。
- (7) 本病と疑われる症状が発生した場合は、最寄りの農林振興センター普及部、または病害虫防除所に連絡する。

〈キュウリにおけるミナミキイロアザミウマ防除薬剤例〉

薬 剤 名	使用時期	本剤の使用回数	希釈倍率	10a 当たり 散布液量
スピノエース顆粒水和剤	収穫前日まで	2回以内	5000倍	100～300リットル
アフーム乳剤	収穫前日まで	2回以内	2000倍	100～300リットル
コテツフロアブル	収穫前日まで	2回以内	2000倍	150～300リットル
アドマイヤー水和剤	収穫前日まで	3回以内	2000倍	150～300リットル
ベストガード水溶剤	収穫前日まで	3回以内	1000～ 2000倍	100～300リットル
ダントツ水溶剤	収穫前日まで	3回以内	2000～ 4000倍	150～300リットル
アルバリン顆粒水溶剤	収穫前日まで	2回以内	2000倍	100～300リットル
スタークル顆粒水溶剤	収穫前日まで	2回以内	2000倍	100～300リットル
ハチハチ乳剤	収穫前日まで	2回以内	1000～ 2000倍	150～300リットル

※農薬使用にあたっては、使用時期、総使用回数、希釈倍率等を必ず確認する。

MYSVに感染したキュウリの病徴



写真1 黄化し、えそ斑がみられる葉



写真2 黄化し、部分的に白く枯死している葉